

## 講師プロフィール 葉 紅



中学1年の時に鄧小平が復活し、学校教育が再開する。  
(この時期の中学卒業生は「上山下乡」と言って農村部に行かされていた)

外国語専門高校の北京市外国語学校に進学し日本語を学び始める。

一年間社会人を経験し、大学受験が復活し、「文革」後の初の大学生になる。

第二外国語学院のアジア・アフリカ言語学部日本語科で日本語を学ぶ。

1981年来日し、昭和女子大学に編入。万葉集に出会う。

早稲田大学大学院に進学し、文学研究科上代文学の修士、博士課程を修める。

法政大学、中央大学などの非常勤講師を経て、現在駿河台大学グローバル教育センター教授

# 『万葉集』を読み始めたきっかけ

- 1 万葉仮名で書かれた万葉集を手にした時の衝撃→漢字で書かれているが、序文や題詞の他は全く意味が分からない。  
万葉仮名の存在を初めて知る。
- 2 天皇から庶民まで、広い層の人たちの歌が収めてある。
- 3 日常のこと、草花や自然のこと、男女のこと、親が子への思いなど素朴な感情が詠まれた歌が多く、惹かれるようになる。

# 『万葉集』 1番目の歌

籠毛與 美籠母乳 布久思毛與 美夫君志持

此岳尔 菜採須兒 家告閑 名告紗根 虚見津

山跡乃國者 押奈戸手 吾許曾居 師吉名倍手

吾已曾座 我許背齒 告目 家呼毛名雄母

泊瀬朝倉宮御宇天皇代 大泊瀬稚武天皇  
天皇御製歌

籠毛與 美籠母乳 布久思毛與 美夫君志持

こもよ みこもち ふくしもよ みぶくしもち

此岳尔 菜採須兒 家告閑 名告紗根 虚見津  
このをかに なつますこ いえのらせ なのらさね そらみつ

山跡乃國者 押奈戸手 吾許曾居 師吉名倍手  
やまとのくには おしなべて われこそをれ しきなべて

吾己曾座 我許背齒 告日 家呼毛名雄母  
われこそをれ われこそはのらめ いえをもなをも

# 万葉の歌に詠まれた風や雲

思いをのせる

想念の風  
君待つとわが戀ひをればわが屋戸のすだれ動かし秋の風吹く  
(4-488) 額田王  
風をだに戀ふるは羨もし風をだに來むとし待たば何か嘆かむ  
(4-489) 鏡王女

書信を運ぶ使者  
み空行く雲も使と人はいへど家裏遣らむたづき知らずも  
(20-4410) 大伴家持

死者を偲ぶよすが  
真幸と言ひてしものを白雲に立ち棚引くと聞けば悲しも  
(17-3958) 大伴家持

國遠み思ひな詫びそ風の共雲の行くなす言は通はむ  
(12-3178)

# 吉野からの眺望





吉野の山々にかかる夏空  
の雲

金峯山寺からの眺望

## 令和の出典となった『万葉集』

大伴旅人が地方官吏を招いて開いた観梅の宴で読まれた歌32首の序文に見ることができる。

天平二年正月十三日 萃于帥老之宅 申宴會也 于時初春令月 氣淑風和  
梅披鏡前之粉 蘭薰珮後之香 加以 曙嶺移雲松掛羅而傾蓋(一部抜粋)

- 王羲之の『蘭亭集序』に倣うものが多いとされている。
- 梅は萩に続いて万葉集で二番目に多く読まれ、桜よりも多くの歌が残っている。
- 当時、梅は主に白梅。香りがよく巻一、二や巻十一などの古歌謡や民謡を含む巻には一首もないことから、この時代に渡来したと言われ、舶来品として珍しく非常に好まれていました。
- あをによし奈良の都から、天さがる鄙へ。大伴旅人は都の奈良から太宰の帥と任命され筑紫の辺境に。山上憶良と共に筑紫歌壇が形成される。



# 中国語に訳された『万葉集』

『诗苑译林 万叶集 上下』 杨烈 译  
湖南人民出版社  
1984年版

卷五 820

梅花今日盛，  
今盛究何由，  
只为相思友，  
簪花插满头。

筑后守葛井大夫

『日本文学丛书 万叶集 上下』 金伟 译  
人民文学出版社  
2008年版

卷五 820

梅花正在盛开，  
亲爱的伙伴们，  
快插入发间吧，  
如今花正盛开。

筑后守葛井大夫

「梅花の歌三十二首 併せて序」巻5(815～846)

春されば まづ咲く宿の 梅の花 独り見つつや 春日暮さむ

5-818 筑前守山上大夫

世の中は 恋繁しゑや かくしあらば 梅の花にも ならましものを

5-819 豊後守大伴大夫

梅の花 今盛りなり 思ふどち かざしにしてな 今盛りなり

5-820 筑後守葛井大夫